

[制作記録]

デジタル刺繍の研究と制作、発表

- 表現への展開 -

Presentation and Study and Production of Digital Embroidery
: Developing Toward to Expression

大高 亨
OHTAKA Tohru

1. はじめに

近年、工芸系ギャラリーやクラフトショップなどで、手刺繍やこぎん刺し¹の作品が増加しており、学生の中でも刺繍に関心をしめす人が増えてきている。しかし、手刺繍、こぎん刺しの手仕事にかかる時間は、手織に比べても多くの時間を要する。また、刺繍技法を身につけるにも多く時間と経験が必要であるため、途中で挫折してしまう学生もいるのが現状である。

近年のテキスタイル業界では、あらゆる分野で合理化とデジタル化が進んできており、刺繍マシンによる制作も多く導入されてきている。そこで、将来刺繍マシンを導入することを念頭に置き、本研究を進めることとした。

2. 研究の目的

本研究はこういった現状の中で、授業カリキュラムの工芸演習(三)染織の科目「デジタルテキスタイル」という私が本学赴任以来続けてきている授業に、「デジタル刺繍マシン」を将来加えるため、まずは自身の制作に導入し、作品を発表、展示することを目的とした。

3. デジタル刺繍マシンの利点、欠点

現在、よく知られている産業用刺繍マシンのメーカーはタジマ工業さんなどがあるが、専門業者さん向けということもあり、価格は数百万円もする。しかし、私が現在使用している刺繍マシン機は、ブラザーのイノヴィス4000-WMS92という機種で、比較的安価な家庭用ではあるが、多色の色を同時に使えないという点と、刺繍可能範囲が多少狭いことを除けば、刺繍マシンの利点は十二分に備えている機種である。

刺繍マシンの利点は、「精緻な縫い柄が数時間で縫えること」「縫いの技法の多くが入力されており、縫い方を覚えなくてもすぐに選択し、縫えること」「新しい図柄をフォトショップやイラストレーターなどで作成し、オリジナルの刺繍柄を作成できること」「オリジナルの刺繍柄を紙媒体ではなく、デジタルデータとして多く保存できること」「細かい縫いでも刺し間違いがない」などが挙げられる。一方欠点は、「マシン自体の価格が高い」「マシンの使い方やデータ処理などが複雑で、使いこなすにはそれなりの時間が必要」「布に対して正確な位置に刺繍することは容易ではなく、経験が必要」などが挙げられる。

しかし、このような欠点は新しい技術を使う上では必ずついて回ることであり、そもそも優れた技術を使いこなすにはそれなりの努力と多くの経験や時間が必要なのは当たり前であろう。

4. 表現への展開

今回発表、展示した作品は、刺繍ミシンの正確性と布素材の持つ伸縮性を合わせ、自身の表現へと展開したものである。今まで私は、デジタルジャカード織²をメインの技法とし、幾何柄やオプティカル柄などを意匠として多く使用してきた。織の持つ構造や融通性、糸素材の風合いなどの特徴を生かし、幾何柄などと合わせることで得られる視覚的意匠を、様々な方向から研究し、表現へと展開している。

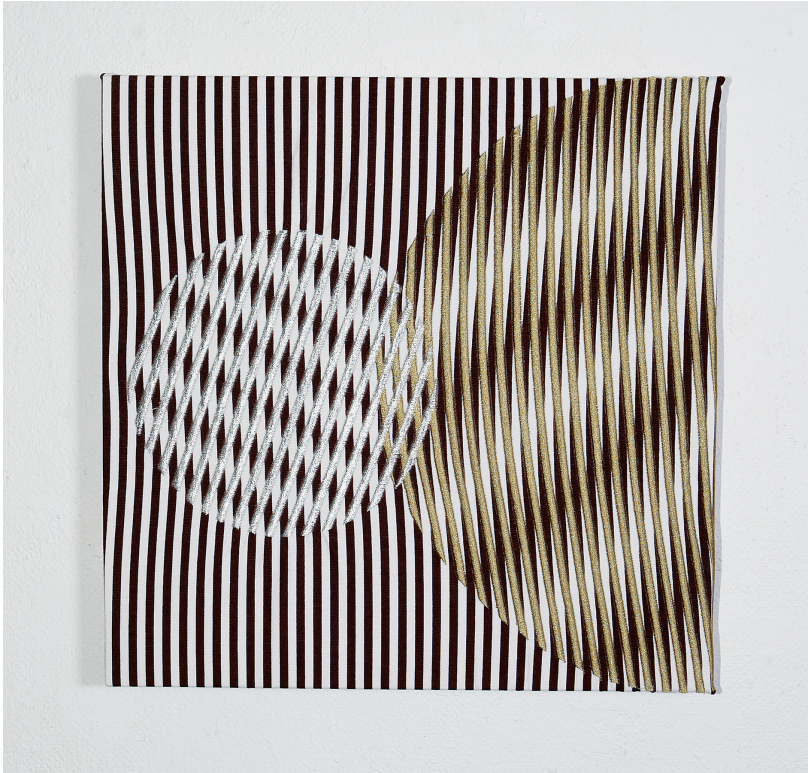
刺繍ミシンは「布が縮み、ずれること」が当たり前であり、既成の正確にプリントされた生地、そのプリントと同じ柄を刺繍することで生じる縮みやずれが、「モアレ」という視覚的意匠効果を生むことに私は着目している。この視覚的意匠効果を表現として昇華し、作品を発表することが今回の目的であった。



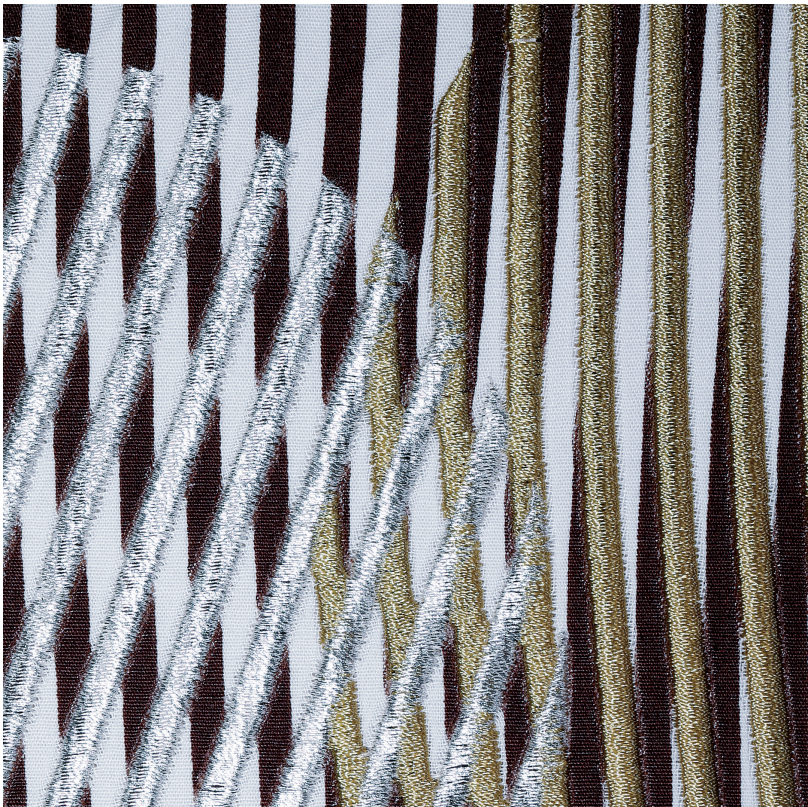
2019年個展会場風景 ガラリーギャラリー (京都)



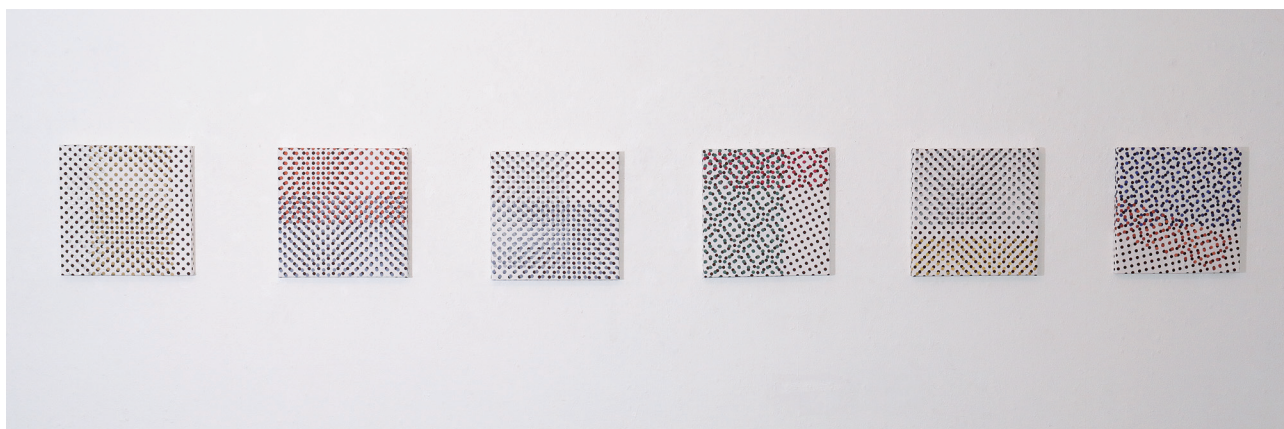
2019年 Line on line series. 巷房 (東京)



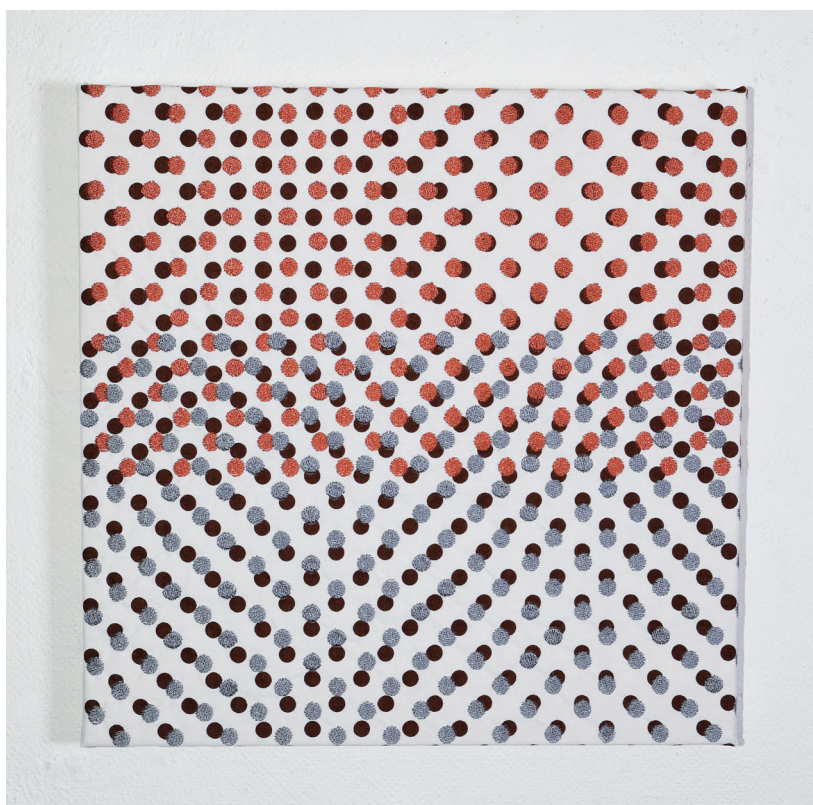
Line on line-1905
デジタル刺繍
綿、ポリエステル



Line on line-1905detail



2019年 Dot on dot series.



Dot on dot 1908
デジタル刺繍
綿、ポリエステル

註

- 1 青森県津軽地方に伝統的に刺されている刺子の一種で、こぎん刺しという。
- 2 デジタル制御されたジャガード織機でおられた織物であり、ジャカード織機はジョセフ・マリー・ジャガールが発明したパンチングカード（紋紙）により経糸を制御し、紋様を織り出す自動織機である。

附記

本制作記録は、平成31年度奨励研究の成果報告である。

（おおたか・とおる 工芸科／染織）
（2019年11月7日 受理）